

千々石ミゲル墓所推定地 第3次発掘調査 記者発表記録(その1)

今回は2017年9月8日に現地にておこなわれた「千々石ミゲル墓所推定地第3次発掘調査に関する記者発表」の様子を4回にわたりお伝えします。まず今回の発掘調査実行委員会会長をつとめられた立石暁氏（長崎総合科学大学理事長・元長崎県副知事）より今回の発掘調査に至る経緯が語られました。

なお、文中のデータおよび見解等は記者発表がおこなわれた9月8日時点のものであることを、おことわりしておきます。



記者発表のようす 左より立石暁氏、大石一久氏、浅田昌彦氏、竹田ゆかり氏

■立石 暁 実行委員会会長

今回の発掘調査は、民間の実行委員会形式により実施という全国的にも非常に珍しい方式だと思います。というのは、この墓所と墓そのものが千々石ミゲルのご子孫である浅田昌彦氏の所有であるということで、これまで二回浅田氏個人の発意で発掘を試みましたが、思いがけない障害もあり、墓壙までたどりつくことができませんでした。しかしあと一回墓の中まで発掘したいという強い気持ちが氏のなかであり、それを地元の歴史愛好会の皆さんが支援しようということになったのです。

浅田氏の意向を受けて地元の「たらみ歴史愛好会」のみなさん、「千々石ミゲル会・諫早」のみなさん、「大村歴史懇話会」のみなさん、「(雲仙市) 千々石ミゲル研究会」のみなさん、この四者が一緒になって「千々石ミゲル墓所発掘調査実行委員会」を作りました。そこでまず発掘のための資金を集めるとい

うことになり、この面ではずいぶん苦勞しました。結局500万円以上集まりましたが、このような形で公的な資金を全く入れず、ある意味「老人パワー」でこの発掘をやってきたことは全国的にも例のないやり方ではないかと自負しています。またミゲルの出生地である前千々石町長の町田義博氏の企画により、雲仙市千々石町にある小・中学校の皆さんからはワンコイン募金をしていただき、この発掘を支えていただきました。700名の小・中学生たちが参加してくれたことも大変感動したできごとでした。



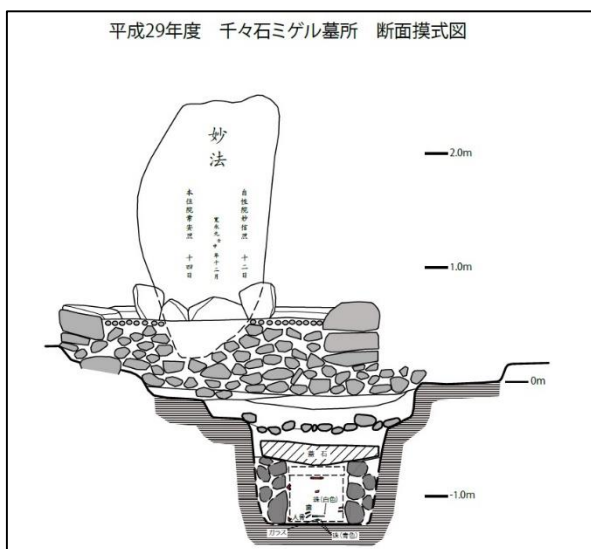
8月20日に発掘調査をはじめましたが、今日で発掘調査は終了します。今後現場を原状復帰し元に戻す作業がありますが、発掘調査としては今日で終わりということでご理解をいただきたいと思います。

今回の発掘は、第一次、第二次を含めて別府大学の田中裕介教授が指導監督をされていますが、田中教授の指導のもと、現場で発掘を指揮されたのが(株)埋蔵文化財サポートシステムの竹田ゆかり氏です。竹田氏からは墓の遺構や出土した遺物についての説明がありました。

■竹田ゆかり 氏

発掘調査は今回の前に2回行われており、基壇の内部、墓石の前面のところまで調査は終わっていました。ですから基壇の中はある程度把握できた状態だったので、今回は礫が大量に詰まっていた基壇の下をさらに調査していくことになりました。基壇の礫を外した下に何があるのかを調査するというのが今回の目的でした。

まず墓石と基壇の石組の一部を外し、外側にも少し範囲を広げて掘ってみると、基壇の下に基壇より古い時代の集石遺構が検出されました。集石遺構の礫を取り外すと約2.3m×2mの方形土壌が検出できました。それが一段目の上面の部分です。一段目の方形土壌をさらに30cmくらい掘り下げたところに、約1.7m×1.2mの二段目の掘り込みが見つかりました。その時点でおそらくこれが墓壇であると思われま



した。少し掘り下げると墓壇を覆うような状態での集石がありました。この礫を外し掘っていくと蓋石が出てきました。蓋石は3枚あり、わずかな隙間から中を覗くと、蓋石の下約30cmは空洞になっていました。その底の部分には流入土もしくは朽ちた土と思われるものが堆積していましたので、その部分を調査するため蓋石を外しました。

蓋石を取ると同時に取手のようなものが見えてきました〔写真1〕。田中教授が普通のお棺ではなく長持を転用したお棺ではないかと推測されたので、早い段階から長持を転用した「長持棺」であるという前提で調査していきました。堆積している土の面にも長持

の角金具と思われるものがポトンと落ちた状態で出てきました。

棺材である木材はほとんど残っていなかったのですが、長持の棺の部分と外側の墓壙の掘り込みの間に石を詰めていた状態がきれいに残っていました。堆積していた土の下の方から、それまでは角のほうに釘や板状の金属などが出土していたのですが、今度は中央付近に錠前と思われる金属製品が出てきました。（棺の）側板が内側に倒れたときに、側板に取り付けられていた錠前がそのままの状態が残っていたと思われます〔写真2〕。



〔写真1〕



〔写真2〕

西の端の方からは歯が出土しました。これは人の歯だろうということで、その周辺を調べていくと骨片らしきものもありました。これらは取り上げて専門の方に調査を依頼することになっています。

歯のすぐ傍からは最初に報道された白色の小玉が出てきたのですが、その周辺からは何も検出できませんでした。そこでそのまま作業を進めていくと、中央付近の錠前を取り上げた下の部分から、副葬品と思われる青い玉、白い玉、さらに小さい2mmほどの茶色い玉などが、まとまって出てきました。また、一緒に薄い半円形のものが出てきたのですが、取り上げて洗ってみるとそれは透明な板ガラス片でした。これらがまとまって出土したということが重要と思われます。おそらくこれらの副葬品は棺の一番底の部分に溜まっていたもので、それから下はあまり土の堆積もなく、墓壙の底のところに到達した時点で調査は終了という状況です〔写真3〕。

田中教授の所見によると「墓の構造は“二段掘りの石槨木棺墓”で、一段目の規模約2.3m×2mはかなり大きく、外部・内部の構造からも上級武士身分の墓に対応する造りとなっていると思われます」とのことでした。



〔写真3〕 完掘し底が露出した状態の墓壙